ティーティングポートフォリオ

学部・学科	看護学部・リハビリテーション学部	氏名	飯塚　照史

１．教育の責任

義肢装具学（理学療法学専攻2年次学生）
COVID-19感染予防のため，すべてオンラインでの講義形態での対応となった．学生の理解を促すために，教科書に沿って，読ませる・確認する，という手順を取るようにした．具体的には，教科書の当該項を音読し，これを確認するために実践場面における画像や動画を提示した．加えて，5問程度の確認テストを毎回課すことにより知識の定着を図った．

身体障害作業療法学Ⅱ（作業療法学専攻2年次学生）
COVID-19感染予防のため，すべてオンラインでの講義形態での対応となった．主に整形外科疾患に対する作業療法における評価から治療までの一連の流れを，導入場面では大局的に見せることで，学生が概観をつかめるように工夫した．そのうえで，実践場面にある問題（例：関節拘縮や筋力低下，日常生活上の問題など）を提示し，当該問題に対する対処を提示した．さらに，対象者の日常生活をイメージさせるためにも，脊髄損傷者をゲストスピーカーとしてお招きし，オリヒメというロボットを使った社会参加についてお話いただいた．

人体構造学実習（作業療法専攻2年次学生・理学療法学専攻2年次学生）
COVID-19感染予防と併せて，科目特性を踏まえ，一部オンライン，一部は対面式での講義形態となった．オンライン部分では，1年次に学習した筋骨格系の復習とともに，触診におけるポイントとして運動学的視点を伝えた．加えて，オンラインではカメラと人体模型を見せ，触診を模擬的に行い触診部分周囲の筋骨格系の3次元的理解を促した．とりわけ，当該構造と運動学あるいは日常生活との関連を示すことで，興味関心を惹くように計画した．対面式においては，オンライン部分をさらに強固にリマインドさせるため，講義当初に確認テストを行い，講師によるデモを通じてイメージを具体化させ，実際に触診を行うという手順とした．

基礎ゼミⅡ（チューター1年次学生）
すべて対面式にて行った．開始当初には教員の研究内容やリハビリテーションに関わる最近のトピック等を紹介し，本科目での興味関心を惹きだすようにした．また，学生個人におけるリハビリテーション領域での関心事を聞き，これを本科目の最終課題としての発表につなげるために質疑応答を行うことで，焦点化を促した．課題確定後は，当該領域の文献検索方法の教示，論文の批判的吟味，論文形態の違いと特徴等を簡潔に説明した．学生個人が選択した3つの論文の内容をまとめさせ，発表へとつなげた．当該発表においても，学生ならびに教員からの質疑応答を通じた討論を行い，学習内容を掘り下げられるよう促した．

作業療法評価学演習（作業療法学専攻2年次学生）
すべて対面式にて行った．主に筋力検査，関節可動域検査，血圧測定，腱反射の評価技術を教示した．いずれにあっても，当初は動画により実施内容を確認し，これに加えてデモを行うことで，さらなる具現化を図った．のち，学生同士での演習とし，十分にできているかについて教員が確認したうえで，問題がある場合は指摘した．当該技術については，毎回の確認テストで定着を図った．

身体障害作業療法学Ⅲ（作業療法学専攻2年次学生）
すべてオンラインにて行った．オムニバス形式で整形外科疾患を担当した．前期に行った身体障害作業療法学Ⅱを踏まえ，さらに具体的な評価内容の解釈と問題点の焦点化を提示した．これについて，おおむねの流れをつかめたところで症例提示を行い，ICFを用いて障害像を捉えることとともに，これを利用した問題点の抽出を課題提示した．併せて確認テストにより学生の理解を促し，確認した．

人体構造学Ⅲ（作業療法専攻1年次学生・理学療法学専攻1年次学生）
すべてオンラインにて行った．本科目においては，筋骨格系の構造や停止部，支配神経などの教示がメインとなるため，暗記主体である．したがって，当該部分の説明は教科書に沿って進めたうえで，興味関心を惹くためにも，運動学・リハビリテーションとの関連についてのトピックをはさみながら伝えた．また，次学年での実習での3次元的理解を促すためにも，

学生支援
チューター1年次学生，ならびに2年次学生については，セメスター開始当初，ならびに成績判定終了後にオンラインあるいは対面にて面談を行ってきた．学生生活については，主にアルバイトや通学時間，家庭での過ごし方を聴取，必要があればアドバイスを行った．今年度にあっては，特に外出しないことによるストレスフルな状態がうかがえるため，可能な範囲でサークル活動への参加や，身体活動について勧めた．休学中の学生についても，本人あるいは保護者とも，メールと電話にて適宜状況をおうかがいし，学生については来学してもらい，面談も実施した．種々の問題については，いくつかの提案をし，検討するように促した．

２．教育の理念・目的

教育の理念と目的
・学生の背景，学力も様々であることを踏まえて講義を展開する．
・学習内容が実践においてどのように活かされるかを想定できるように教示する．
・医療者としての基本的な倫理について教示する．
・学習習慣の定着を促す．

３．教育の方法

・学生との接し方
当該学生における，現状認識，問題への対処方法，展望，の3つを如何に考えているかをまず以て傾聴する．経験上，問題のある場合の多くは，前2者（現状認識・問題への対処方法）に教員側との齟齬が生じている．しかし，学生にとって大学は，成人への過渡期であるため対処が稚拙であることは致し方ない．したがって，当人が自身の言葉で宣言できるようにいざなう必要がある．具体的には，このままいくとどうなるのか，どうしないといけないのか，を直接聞き，認識を促すこととしている．
・授業の工夫
確認テストと質疑応答を毎回の講義に必ず課すこととしている．これにより自身の理解度の確認を促すことが出来る．
併せて，実践場面の動画・写真などを豊富に用いて，実践イメージに資するように対応している．

・FD・SD活動等に関わる内外の研修会への参加
ベネッセ主催ウェビナー「「Udemy人気講師が教える『WEBによるインタラクティブな授業配信』のポイント参加．2020/5/27
本学FD/SD参加，2021.3.10

・自らの専門分野の成長
自身の専門分野である手のリハビリについて，共同施設と研究を進め，データ収集を継続している．加えて，新たな解析手法を得て新規的提案の準備を整えている．

４．教育の成果

・達成できたこと，できなかったこと
・授業の工夫については実績として達成でき，学生の理解度の把握が出来た．
・外部，内部のFD等で自身の講義内容を再検討することが出来た．
・COVID-19感染予防から学生に対する対面でのフォローが不十分であったと感じる．今後は，如何なる状況であってもオンライン等での対応も選

５．今後の目標

・長期的目標
　定期試験の平均点向上，再試験対象者の減少．
・短期的目標
　確認テストで確認される理解度に応じた個別的指導の実施
　繰り返し対応ができる問題や課題の設定
　実践場面に関する教材の更なる充実
　学生生活状況に応じた面談の実施

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

1）飯塚照史，他：橈骨遠位端骨折に対する掌側ロッキングプレート固定術後のリハビリテーションにおけるHand20と患者満足度の関連性．日ハ会誌13（４）；186－191，2021.1

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	看護学部・リハビリテーション学部	氏名	池田　耕二

1．教育の責任

○学生に対して何を行っているか（すべて）

担当講義科目：各種学生支援

・運動学I：ワークブックを作成し、要点をまとめ学習しやすく支援した。
・運動器障害評価学：WEBと対面を効率よく行うために予習・復習シートを作成し、学生の理解度に合わせて進行した。
・日常生活動作学：WEB講義では教科書に忠実に進行し、自己学習しやすく考慮した。
・日常生活動作学演習：WEB講義と対面講義を有効に行うためにワークシートを作成し、グループ学習と情報共有を経験させた。
・地域理学療法学：WEB講義では教科書に忠実に進行し、自己学習しやすく考慮した。
・地域理学療法学演習：現場のリアリティを出すために、高齢者を外出させる、もてなす模擬プラン学習を行なった。
・早期体験実習：コロナ禍において学内実習を計画実践した。（予習・実践・復習というサイクルを意識した実習とした）
・地域理学療法実習：コロナ禍において学内実習を計画実践した。（予習・実践・復習というサイクルを意識した実習とした）
・老年期障害理学療法学：高齢者の理学療法を整理し、その役割を教授した。

2．教育の理念・目的

○どのような理念･目的等に基づいて行っているか

・自らの教育理念と目的：困っている方に何かしてあげたいと思う気持ちを育み、今の自分にできることを一生懸命実践していくという行動力を養うことを教育理念と目的にしている。

・価値観･信念：理学療法士は、誠実さ・優しさのうえに知識、技術を育み、チーム・協同によって問題を解決していくという姿勢を重視する。A12:D24

3．教育の方法

○どのような方法で２の実現を図ろうとしているか

・学生との接し方：できるだけ全ての学生に声をかけること、またみんなの前で話せる機会を作ること。

・授業の工夫（授業の方法，内容等）：WEB・対面の双方を行う講義においては、ワークシートを作成し、自己学習を促し、わからないところは対面で答えるという講義を構築した。これにより教員側は学生の学習理解度を理解しつつ講義を行うことができた。また学生側の予習、講義、復習という習慣の形成にも貢献したと思われる。

・FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加：

①2020度年３月10日FDSD研修会、②全国リハビリテ-ション学校協会 2020年度教員研修会（Web開催）、
③2020年度日本理学療法士教員協議会（WEB研修）、④臨床実習指導者研修会（大阪）、⑤Covid-19理学療法教育緊急シンポジウム、等

・自らの専門分野の成長：日常生活学や地域理学療法は身近な問題を扱うため、専門知識の学習よりも考え・行動することが重要となる。学生はどこまで興味をもって学習するか疑問であったが、真面目に取り組んでおり、少しずつ講義内容のレベルアップがはかれるように思われた。コロナ禍のなか、誠実に学習に取り組んでいたことは、理学療法教育を専門とする自身の学習となった。

4．教育の成果

○その方法によりどのようなことが実現できたか

・達成できたこと,できなかったこと（達成レベル）：学習の要点を提供することができ、概ね学生の理解は得られたと考える。しかし、知識の定着化については疑問が残っている。また、こうした知識が実践に結びついているかは臨床実習で確認したい。

・授業アンケートの結果：後期は３教科が対象となったが、満足度について概ね4.0 以上あった。 資料の提供方法や作り方については再考したい。

○今後どうしたいか

・短期的・長期的目標：コロナ禍でのWEBと対面講義であったので、今回の講義実践における知識の定着化を確認し、臨床実習、国家試験にむけて知識の整理を行いたい。また、講義用の教材や映像づくりを各病院と連携し、積極的に行いた

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

※上記１～５の記述について，根拠資料を示す

・「webシラバス参照」

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学科	氏名	伊藤　健一

1．教育の責任

（講義）
基礎ゼミII、内部障害評価学、内部障害理学療法I、内部障害理学療法II、内部障害理学療法学演習、医療リスクマネジメント、客観的臨床能力演習、職場管理論、理学療法技術特論、理学療法卒業研究

（実習）
早期体験実習、地域理学療法実習、理学療法評価実習、総合臨床実習I、総合臨床実習II

2．教育の理念・目的

新人理学療法士として備えておくべきレベルの知識と技術の修得（習得）はもちろんのこと、患者が抱える「障害」と向き合い、その解決に努力を惜しまない人材の育成を目指す。また、その解決手段としてあらゆる選択ができるよう、多角的な視点も身につけてほしいと考える。

3．教育の方法

専門科目においては、以下の内容を盛り込み展開するよう心がけている。
（1）障害の理解
・障害の成り立ちを理解させる
・患者の障害を観察させ、患者の心情を考える
・患者の訴えを聞かせる
・自身の考えと患者の訴えのギャップに気づかせる
・自身が理学療法士としてできることを考える
（2）海外での理学療法の現状と最先端医療の教授
講義方法は、LMSを最大限に活用し、反転講義とグループワークを積極的に実施している。

4．教育の成果

本年度開講された、内部障害理学療法学Iにおいては知識、技術、思考過程の麺において記述テスト、実技テスト、レポートにおいて多くの学生がシラバスに掲げられた到達目標を達成していた。また、授業に対する授業アンケートの結果からは6評価項目とも平均4点以上（5点満点）であったことから、学生に対しても適切な教育が提供できていたと思われる。

5．今後の目標

これまで以上に 転講義を活用しながら、ディスカッションやグループワークを増やしていく。

- **必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）**

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学科	氏名	大浦　智子

1．教育の責任

1．担当授業科目

基礎ゼミⅡ（15/15）, 早期体験実習, 地域実習（作業療法）, 基礎作業学（主：15/15）, 地域作業療法学（主：8/15）, 疫学（看護学科）（5/15）, 保健師国家試験対策（疫学）（看護学科）

2．学生支援

作業療法学専攻1年生担任, チューターおよびゼミにおける学生支援, その他：適宜, 学生の状況に合わせて個別の面談機会をもち, 各担任・チューター・相談室と連携

3．教務・FD活動

・全学FDSD委員として, 学部特性に配慮したFD講演会・研修会を企画・運営

・学科教務ワーキングメンバーとして, 学科における教務関連事案の調整および新カリキュラムを見据えた情報収集

2．教育の理念・目的

医療専門職をめざす学生に対し, 自ら考え責任を持った行動ができるようになることを目的に, 自律性を重んじた教育を行っている.

3．教育の方法

1．担当科目・学生支援

1）基礎ゼミⅡ（15/15）: 基本的内容を講義したうえで, 学生各自が演習するとともに学生間で討議する場を設け, 教員はファシリテートの立場を意識してアクティブラーニングを促進している. 各ゼミで共通の指導事項について共用ファイルを作成し, 担当教員に提供した.

2）早期体験実習: 2020年度は学内実習に振替. 自身の作業療法士としての経験を伝え, 学生同士の討議ではに多角的な視座を提示するよう務めた.

3）地域実習（作業療法）: 2020年度は学内実習に振替. 担当講義・演習のほか, 学生同士の討議では多角的な視座を提示するよう務めた.

4）基礎作業学（15/15）: リアルタイムの遠隔講義において個別に意見を求めたり, 提出課題の状況に応じたフィードバックを行った. 一部対面講義においては演習による体験学習機会の提供と確認テストによる知識の定着を図った.

5）地域作業療法学（8/15）: リアルタイムの遠隔講義において個別に意見を求めたり, 提出課題の状況に応じたフィードバックを行った.

6）疫学（看護学科）（5/15）

7）保健師国家試験対策（疫学）

8）作業療法学専攻1年生担任: 理学療法学専攻1年生と合同で大学生活の過ごし方に関する留意事項の説明や案内を継続して行っている.

9）チューターおよびゼミにおける学生支援: 前期・後期における定期個別面談のほか, 必要に応じて個別面談・メールや電話の連絡を行っている. 出席状況によっては家族との電話連絡・三者面談を行っている.

2．FD活動

2020年度全学FDSD講演会参加, 2020年度保健医療学部FDSD研修会参加, 2020年度リハビリテーション学科FD研修会参加, 2020年度保健医療学部FDSD講演会参加, 学外主催のFDセミナーや講演会など, 複数参加

3．自らの専門分野の成長

科学研究費の獲得による研究の継続とともに, 関連団体・学会の理事や委員活動を通じて, 当該分野の最新情報の収集を図っている.

4．教育の成果

1．達成レベル

授業の課題レポートなどから学生の習得状況の差が明確となった. 学習習慣がない学生への対応についてさらなる検討が必要である.

2．授業アンケート

実施なしのため不明

5．今後の目標

1．長期目標

十分な知識・技術をもち, 医療専門職としての自覚と責任感をもった行動ができる学生を育成する.

2．短期目標

学生が学びの到達目標を十分理解して取り組み, 専門職として恥じない知識・技術を獲得できるような方策をとる.

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

1．シラバス: 奈良学園大学ホームページ参照

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学科	氏名	柴田政彦

1．教育の責任

担当授業科目

看護学科

生化学

疾病治療論Ⅰ, Ⅲ, Ⅴ

ペインコントロール論

基礎看護技術Ⅱ

疫学

リハビリテーション学科

人体機能学Ⅰ

痛み学概論

内部障害学Ⅰ, Ⅱ

疼痛リハビリテーション論

2．教育の理念・目的

教育理念と目的

社会に役に立つ医療者を育てる

価値観・信念

要点を押さえた教育を行う

学生の立場に立って教える

学生の意欲を引き出す

3．教育の方法

授業の工夫

教科書に沿って授業を進め、重要なポイントを示す

授業のたびに理解確認問題を実施する

緊張感を保つために個別に当てて答えさせる

4．教育の成果

達成できたかどうかの確認は難しいが、手ごたえのあった授業のアンケート評価は高かった（看護　疾病治療論Ⅴ）

リハビリテーション学科学生の理解力が低くどのような授業を行ったら理解できるか模索中

5．今後の目標

今後国家試験合格状況を分析したうえで授業内容を修正していきたい

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）
https://tango.naragakuen-u.jp/aa_web/art_PrintPreview.aspx 授業計画 第1回自律神経機能と内臓機能ー交感神経系と副交感神経系 第2回循環器系①　心臓、血管系とリンパ系 第3回循環器系②　循環調節と局所循環について 第4回血液の生理　血液の機能・組成・血液型・止血機構・生体防御機構 第5回呼吸器系①　呼吸器の構造、換気とガス交換 第6回呼吸器系②　呼吸系の調節と呼吸の異常・人工呼吸 第7回内分泌の機能①　脳・甲状腺由来のホルモン 第8回内分泌の機能②　副腎・膵臓由来のホルモン、骨代謝の調節 第9回消化器系の機能　消化管の運動と分泌機能、消火と吸収機能、肝臓のはたらき 第10回生殖系の機能　男性の生殖機能、女性の生殖機能、性染色体異常 第11回栄養と代謝　食物成分とエネルギー、3大栄養素のエネルギー代謝 第12回腎機能と尿の生成　腎の機能的構造、排尿の仕組み 第13回体液　水分とイオンバランス、体液酸塩基平衡 第14回体温調節　熱産生と熱放散、体温調節機構、低体温 第15回まとめ

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学	氏名	辻下　守弘

1．教育の責任

○学生に対して何を行っているか（すべて）

担当講義科目：各種学生支援

・リハビリテーション論（看護学科）：eラーニングシステムを作成し、予習復習ができる体制を整えて学習効果を高めた。
・理学療法概論：クラスルームを利用して、遠隔授業での学習支援を行った。
・リハビリテーション概論（リハ学科）：遠隔授業では教科書に忠実に進行し、自己学習しやすく考慮した。
・基礎運動療法学：eラーニングシステムを作成し、予習復習ができる体制を整えて学習効果を高めた。
・チーム医療論（リハ学科）：eラーニングシステムを作成し、予習復習ができる体制を整えて学習効果を高めた。
・チーム医療論演習（看護学科）：クラスルームのグループセッション機能をフル活用した討論と発表を行った。
・早期体験実習：コロナ禍において学内実習を計画実践した。（予習・実践・復習というサイクルを意識した実習とした）
・地域理学療法実習：コロナ禍において学内実習を計画実践した。（予習・実践・復習というサイクルを意識した実習とした）
・ヘルスプロモーション特論（大学院）：遠隔授業とクラスルーム利用を併用し、毎回課題を出して学習効果を判断した。
・在宅看護学特論Ⅲ（回復支援）（大学院）：遠隔授業とクラスルーム利用を併用し、積極的に質疑応答を実施した。
・在宅看護学特論Ⅱ（慢性期）（大学院）：遠隔授業とクラスルーム利用を併用し、文献を用いた討論を実施した。
・在宅看護学特論演習（大学院）：主に遠隔授業による学生間の討論をファシリテーションして実践思考を導いた。
・特別研究（大学院）：指導教員として学生の修士論文作成指導を行い、副査として論文審査にも関与した。

学科では学科長として全教科の質向上を管理するとともに個別な学生指導も実践した。大学院では学生の研究指導を積極的に実践した。

2．教育の理念・目的

○どのような理念･目的等に基づいて行っているか

・自らの教育理念と目的：大学の教育方針である「人を支える人になる」を常に意識して、病いに苦しむ人々の立場になる医療実践家としての態度を身につけ、ケアを実践するために必要な知識と技術を習得させることを教育理念と目的にしている。

・価値観･信念：理学療法士は、人を支える弱者視点の立場を前提とし、その実践には科学的根拠に基づくため常に最新の情報を文献や学会等の参加により収集することを心がけている。教育においても、国家試験を合格するための知識と技術を超えて、常に革新する医療現場のリアリティを学生に伝えることで学習意欲につなげる努力をしている。

3．教育の方法

○どのような方法で２の実現を図ろうとしているか

・学生との接し方：常に学生目線と保護者目線を重視し、まず十分に相手の話を傾聴した上で、適切なアドバイスを与える努力をしている。

・授業の工夫（授業の方法，内容等）：遠隔授業が大部分を占めたため、学生の在宅における自主勉強を支援する体制を整備した。オンデマンド型は最小限にして、ZOOMによるリアルタイム授業を実践し、その全授業について動画を配信し、復習と予習のための課題を与えた。また、独自のeラーニングシステム（learningBOX:株式会社龍野情報システム）を導入し、リハビリテーション論（看護学科）とリハビリテーション概論（リハ学科）については遠隔授業と併用して、予習復習の自主学習を支援した(資料1を参照）。

・FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加：

①学内FDSD研修会への全参加、②2020年度日本理学療法士教員協議会（WEB研修）、③治験・倫理審査委員会委員研修会（慶応大学・WEB研修）、④臨床研究プロジェクトマネジメント研修会（慶応大学・WEB研修）、⑤Covid-19理学療法教育緊急シンポジウム（WEB研修）

・自らの専門分野の成長：専門とするリハビリテーション医学および理学療法学に関する専門雑誌を定期購読し、最新の情報と知識の習得に努めた。国内外の専門領域におけるWEB学会に参加し、シンポジストや演題発表者として研究活動の情報発信を行った。専門分野であるバイオフィードバックやバーチャルリアリティに関する依頼論文を執筆することが、これらの情報整理となり教育活動につなげることができた。

４．教育の成果

○その方法によりどのようなことが実現できたか

・達成できたこと,できなかったこと（達成レベル）：令和2年度は急に遠隔授業中心に切り替わったため、特に前期についてはZOOMやクラスルームの操作及び使用方法の習得に時間を要した。授業を妨げることはなかったがマイナーなトラブルが生じたことも多かった。前期後半から後期にかけては教員及び学生も遠隔授業に慣れたため、ゆとりを持った教育ができたと考えている。ただし、学生の全員参加による授業ができたとは言い切れず、今後は学生の全員参加が可能な授業形態を模索し、学習効果をより高める努力をするつもりである。

・授業アンケートの結果：グーグルクラスルームによる授業の理解度に関するアンケート調査においては、「よく理解できた」と回答した者の割合が、6科目で3割から4割、「まあまあ理解できた」と回答した者の割合が、6科目で6割から7割となっていた。 特に、3日間集中の演習科目であったチーム医療論演習（看護）では「よく理解できた」が24.7%、「まあまあ理解できた」が75.3%と受講者全員が理解できたと回答していた。これはZOOMのグループセッション機能を多用することで、8人程度のグループ内による活発なディスカッションが授業への参加意識を高め、学習効果も高くなったと考えられる。

○今後どうしたいか

・短期的・長期的目標：＜短期的＞令和3年度も遠隔授業と対面授業のハイブリッド形態となるため、それぞれの授業形態の特徴や利点欠点を十分に理解した上で、効果的な授業方法について探求していきたいと考えている。令和2年度は遠隔授業主体であり、学生の講義に対する理解度は「よく理解できた」が3割程度にとどまっていたので、5割を超えることを目標にしていきたい。遠隔授業においてもZOOMやグーグルクラスルームの機能をフルに活用して授業を進めていきたいと考えている。＜長期的＞遠隔授業のスキルを活かして、担当する授業すべてにおいて反転授業やアクティブラーニングに転換していきたいと考えている。また、AI人工知能を応用した教材開発や臨床実習のロボット活用なども開発を進めていきたいと考えている。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

※上記１～５の記述について，根拠資料を示す

・1については5科目についてシラバスを添付した。

・3については独自のeラーニングシステムについて資料1を添付した。

・4については授業の理解度について資料2を添付した。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部/リハビリテーション学科	氏名	西川 隆

1．教育の責任

＜担当授業科目＞
精神医学（理学・作業 1年次後期 15回 必修）
神経内科学（理学・作業 2年次前期 15回 必修 必修）
内部障害学Ⅰ（総論）（理学・作業 2年次前期 オムニバス5/15回 必修）
内部障害学Ⅱ（各論）（理学・作業 2年次後期 オムニバス10/15回 必修）
精神科（各論）（理学・作業 2年次後期 必修）
精神障害作業療法学Ⅰ（総論）（作業 3年次前期 オムニバス5/15回 必修）
高次脳機能障害作業療法学Ⅰ（総論）（作業 3年次前期 オムニバス5/15回 必修）
疫学（看護 2年次後期 オムニバス1/15回 必修）
フィジカルアセスメント（看護 大学院 1・2年次前期 オムニバス3/15回 選択）

2．教育の理念・目的

将来医療・保健分野の専門職者となる人材を育成することを目的としている。

医療・保健に従事する者の行動は対象者の生命の安全と健康に直結するので、専門職者には厳格な倫理と正しい医学的知識が求められる。

教育一般に共通する理念は学生個々人の潜在的能力を最大限に成長させるということにあるであろう。しかし、殊「医療・保健の教育」においては、将来彼らに生命と健康を委ねることになる患者・障がい者への責任こそがより重大である。

3．教育の方法

学生に対しては、将来の医療・保健専門職者となるべき者としての自覚を求める。自らに与えられた課題に誠実に応える態度と、必要な知識・技術を身に着ける努力を怠るならば、4年後に医療の現場に携わることはできない（携わるべきではない）ことを伝えたい。

精神医学を例に挙げれば、私自身の経験を踏まえて症例を紹介する中で、患者の障害や症状が正常な機能の脱落という個人病理の側面だけでなく、社会生活の現実が患者に強いている環境の側の病理という側面があることを説明している。患者が呈している無力状態や妄想、逸脱行動には、患者が過酷な現実から何とか自らを救済しようとする方策として解釈しうる側面があり、そのような見地に立ってこそ初めて、患者への共感や支援の方法が模索しうるのである。治療的態度を欠落した知識の所有者は容易に、専門用語を用いて患者の疾患や症状にレッテルを張るだけの抑圧の加担者に堕してしまう。また例えば、精神疾患の遺伝的負因についても、疾患そのものが遺伝するのではなく、発症を準備する脆弱性こそが負因として伝わるということを詳しく説明している。医療従事者の不十分な知識は社会の差別的意識を助長しかねないからである。

他の授業についても、断片的で不確実な知識が誤った治療行為に直結することを常に念頭に置き、体系的で理論的な病態理解が得られるように努力している。

4．教育の成果

これまでの本学での教育成果は不十分であると言わざるをえない。試験は国家試験レベルの基本的な知識を問う問題しか出題しなかったが、少なからぬ受講者は不十分な知識しか修得できなかった。

2021年度前期の神経内科学ついては64名（74名中）の受講者からアンケートの回答があり、「教員の熱意と意欲」4.59が全教科平均（4.43）より高かったが、それ以外は押し並べて平均と同程度かやや下回り、「総合的満足度」は4.17で全教科平均（4.07）より若干低かった。 とりわけ「内容や要点の分かりやすさ」に関する項目が3.98と4に達しなかった。

「内容や要点の分かりやすさ」が不十分な点に関しては、教員の教育技能や教科の難度も要因であるかもしれないが、受講生の参加態度にも大いに問題があると思われる。長年医学教育に携わってきた者として正直な感想を述べれば、本学科の一部の学生は医療従事者たらんとする動機が希薄で、勉学への熱意も乏しいようである。十分な志望動機を有する学生を入学させられるように、選抜の方法と基準を再考する必要があるのではないか。

5．今後の目標

長期的目標は上記「2．教育の理念」と同じく、将来医療・保健分野の専門職者となる人材を育成することである。

短期的目標は、国家試験レベルの基本的な医学的知識を受講生に修得させることとする。その中で、医療従事者として最低限守るべき社会人としての倫理的態度を身に付けさせたい。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部/リハビリテーション学科	氏名	橋本　雅至

1．教育の責任

スポーツ医学(１年後期)：

学生達が経験したスポーツに関連する事項を例示し、教科書に掲載されているスポーツ傷害にとらわれず、スポーツ選手やスポーツ活動に関わるスタッフの解説を多く扱う。整形外科の講義を受けていない時期の臨床関連の講義は、学生達の学習意欲を高めることを目的に構成した。

運動学Ⅱ(２年前期)：

Ⅰ年次の解剖学、生理学を確認しながら、関節の機能を解説する。

筋骨格系理学療法学Ⅰ(総論)(３年前期)：

関節ごとに評価方法や、運動療法の方法を理論の解説だけではなく、その実技の完成度を高めることを目的に行う。

筋骨格系理学療法(各論)Ⅱ(３年後期)：

理学療法の対象の代表疾患ごとに理学療法士が知るべき病態把握、評価、治療手技について解説する。

スポーツ障害理学療法(３年後期)：

整形外科(運動器)分野の傷害の中でも医療機関においてよく遭遇する傷害を例示して、スポーツ分野特有の治療方法や手技を解説し、実技を学ぶ。

理学療法計画論(３年後期)：

運動器や神経系の疾患・障害、内部障害も含めた理学療法の対象疾患を例示して、その病態把握と評価項目、治療方法、予後など教科書、文献から情報収集を行い、実際の症例を担当する前の情報収集を行い、一般的な理学寮法の流れを理解する。

2．教育の理念・目的

本学の理念に加えて自らの考えとして、「治すことができるセラピスト」を育成過程の大きな目標とする。卒前教育では、教科書的な疾患や病態の把握を基に具体的な評価方法や、治療方法、治療の効果判定などを修得し始めるスタートとしたいと考える。特に「実技は練習以外に修得方法がない」ことを講義内でも理解してもらい、実技練習の具体的な方法や指示を行う。卒業してセラピストとして臨床場面に立ったときに、何を目指すべきか知ることと、学生の段階で何をすべきかを知ってもらう。講義内では臨床場面の紹介や例示を行いながら、その学年ごとに何をすべきかを講義内で解説する。「考えさせてもわからないことはきちんと教える」ことが教員の使命である。

3．教育の方法

学生の学習意欲を維持し高める：

学生たちの高校生までの経験を取り入れたり、身近なスポーツ関連の出来事などを例にして、講義を進める。スポーツ傷害の詳細だけではなく、セラピストの役割について、実際の活動場面の紹介を交えて解説する。

わからないことに積極的に取り組む意義を知らせる：

知りたいことや講義で出会ったわからないことに積極的に取り組ませるため、講義内で学生に自己学習の促すように質問をして学生たちの学習意欲を高める。

適切なノート作り：

講義内の理解が不十分なことやわからないことをきちんと記録させる。積極的に自分なりのノート作成を促し、自己の振り返りをさせる。

実技の修得と実技練習：

実技は、講義内でポイントをきちんと解説し、反復練習は自己の時間に学生同士を行わせる。練習時の疑問や確認事項は必ず、講義内で捕捉する。

4．教育の成果

スポーツ医学：

講義終了後からの勉強会へ参加する学生も認められる。継続的にスポーツ医学からの派生して学内の関連活動に参加する学生がいる。各学年20名から30名。

運動学Ⅱ：

積極的なノート作りに関して全員にフィードバックを具体的に行い、今後の講義、学習への展開を促した。書き直しを命じた学生も指導内容を反映してノート作成ができていた。

5．今後の目標

短期目標：講義を通じて学習に対する意欲が高まる

長期目標：理学療法士になり、臨床に出てから患者治療に具体的に努力する資質を身につける

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）
スポーツ医学、筋骨格系理学療法Ⅰ，Ⅱのシラバスを添付する。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学科	氏名	山形　力生

1．教育の責任

作業療法学科カリキュラムにおいて，全学年に渡り，基礎から専門までの科目を担当している。

担当授業の概要：

① 作業療法専門科目：

1年次から2年次にかけての専門科目の導入の部分を多く担当している。1年次では高校から大学教育への適応の時期であり、授業の受け方や勉強の仕方なども適宜解説するようにした。同時に学んでいる基礎医学科目（人体機能や人体構造など）の進行程度にも配慮し、基礎医学の知識との関連にも意識して取り入れた。

・ 作業療法概論（1年次　前期）
・ 身体障害作業療法学Ⅰ（総論・脳神経系）（2年次　前期）
・ 日常生活支援学Ⅰ（総論）（3年次　前期）
・ 身体障害作業療法学Ⅲ（応用）（2年次　後期）

② 実習関連科目：

学生が実習場面で経験した内容を基に、学生の発表，グループワークを行うことで経験したことを振り返り、他の学生に共有できるよう指導した。令和2年度は、コロナウイルス感染予防のため、学内での実習となった。予定していた学外実習による体験が同様に経験できるよう臨床現場を連想できる動画や視聴覚教材や遠隔による現場レポートなど教材を工夫し、実習目標が達成できるように指導した。成績評価は，学内実習態度、課題の達成度、積極性や能動性などを基に総合的に評価した。

・ 早期体験実習（1年次　集中）
・ 地域作業療法実習（2年次　後期）

③その他の科目：大学での学びの基礎となる技能（読む・まとめる・伝える）を実際の課題の中で演習し、身に付けてもらえるようにした。

・ 基礎ゼミⅡ（1年次　後期）

各種学生支援：

チューター担当学生を中心に定期的に面談を行い、成績状況や学習上の疑問点などに対応した。

2．教育の理念・目的

臨床での実践力を獲得するための基礎を身につける身に着けることを目標としたい。具体的には評価した結果からリハビリテーションゴールに即した優先される問題点を焦点化できること。そのために障害から生じている機能障害とそれが及ぼすADL上の問題の関連性を考えることができること。以上ができるように指導していきたい。また、評価の実施に際しては対象者と適切なコミュニケーションがとれるようその技術を身につけてることも目標としたい。

3．教育の方法

・学生との接し方

よく出来た点について支持し、努力を要する点には「なぜ、必要か」と「具体的な取り組み方法」を共に考えるようにする。それは、クライエントを支援する立場として重要視することを伝え、将来的な援助者像を意識させるようにする。

・ 授業の工夫（授業の方法，内容等）

始めて学ぶ学生にとって学びやすいように、出版されているテキストの中からイラストや図表が豊富なものを選択し使用している。また選択したテキストの内容に不足しているものには他の書籍等から引用した資料を作成している。授業では対話型の他にアクティブラーニング学習を取り入れ、グループディスカッションも取り入れている。成績評価は，授業内の確認テスト、課題レポート，に配点を行い合計の上成績としている。令和2年度は、コロナウイルス感染予防のため、オンライン授業となり、オンライン授業中の課題による評価も行った。

・ FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加

学内の研修はもとより、全国養成校主催の教員研修会への参加を行い、日頃の取り組みをまとめ演題発表も行っている。

４．教育の成果

授業評価アンケートの結果からは、他の科目の平均的な点数と比べ、満足度は維持されていると判断された（結果を添付）。

５．今後の目標

1・2年生レベル　体の構造や機能に関する知識が活動面ではどのように働いているかをできるだけイメージできるように指導する。 病気や障害などの特徴が作業活動面にどのように影響しているかをできるだけイメージできるように指導する。

3年生レベル　対象者への介入方法の根拠が前学年まで習得した内容が結びつくように指導する。 実習等で経験した内容を、それまでに学内で学んだ内容と関連させ振り返ることで今後の学習の糧となるよう指導する。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

作業療法概論（1年次　前期）の授業アンケート結果を添付。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学科	氏名	阿波　邦彦

1．教育の責任

私の教育活動は、理学療法士（作業療法士）という専門職を養成することである。本学における【担当授業科目】は、１年次は人体機能学Ⅱ、基礎ゼミⅡを担当し、２年次は生理機能実習、運動学Ⅱ、臨床運動学、内部障害評価学を担当している。３年次は理学療法研究法、ゼミ、卒業研究を担当し、各年次において各種実習を担当している。多くの科目は理学療法国家試験に出題される座学であることから、学生の習熟度を適宜確認するため小テスト等を実施し、学生の学修到達度を意識するようにしている。また、グループワークや実習形態の科目では、進行を円滑にし、各科目の教育目標を達成できるよう、ファシリテーターとして働きかけるよう心がけている。なお、比較的低学年での科目を担当していることから、理学療法やリハビリテーション、しいては医学に興味をもってもらえるよう授業を準備・実践するようにしている。

学生支援の面では１回生の主担任であり、学生相談や学生指導を行っている。また、学生生活ワーキンググループや保健医療学部新入生研修タスクフォースメンバーであり、ワーキンググループの活動として学生支援を行っている。

2．教育の理念・目的

私は、理学療法士（作業療法士）を養成するために最低限必要な「理学療法士（作業療法士）に必要な基礎的な知識の習得」、「理学療法士（作業療法士）として必要な情動の習得」の獲得に重点を置いています。理学療法士（作業療法士）の対象者は、傷病によって障害を有する患者や地域在住者、年代も乳幼児から高齢者までととても幅が広いです。そうした方々の助け、その方々の人生を支える仕事が理学療法士（作業療法士）だと思います。そのためには、医学・理学療法学（作業療法学）などの知識だけでなく、人と接する仕事であるがゆえに、その人となりも大変重要だと思います。

3．教育の方法

まず、「理学療法士（作業療法士）に必要な基礎的な知識の習得」を達成するために、私は各【担当授業科目】で学生の習熟度・学習度を適宜確認するために、授業前に小テストを実施しています。特に、国家試験で必ず出題され、かつ各論を学習する上で知識として習得していないと負担になる「人体機能学Ⅱ」、「運動学Ⅱ」等では重点的に小テストを実施し、各問題の回答率や学生が苦手としている内容等を把握するよう努めています。そのため、成績評価では期末の定期試験だけでなく、小テストや課題等を織り交ぜて評定するようにしています。また、実技演習等も含む「生理機能実習」や「臨床運動学」、「内部障害評価学」では、実際に臨床現場で得た理学療法士として大切であろうエピソードなどを学生に伝え、学生自らが理学療法士になるということを考える機会をできるだけ作れるよう心がけ、学生個人が能動的に考えることを促すようにしています。

あわせて、学内FD/SD活動や協会が主催する勉強会等にも参加し、学生に還元できるよう取り組むようにしています。

4．教育の成果

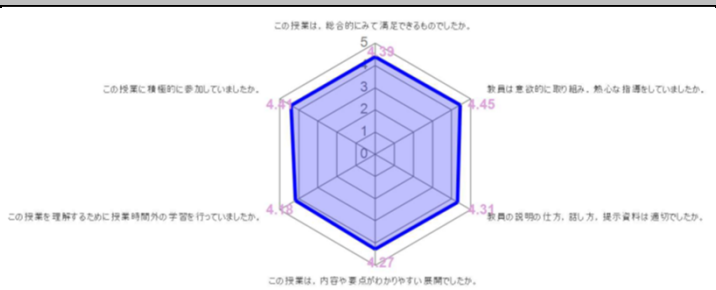
上記の理念、方法で実践してきた結果、各学年における必要知識を獲得させるため、定期試験で再試験者がある一定数出現している。ただし、今後の上回生で必要な知識であるため厳しく評定することも必要だと考える。また、授業アンケートの結果等では「わかりやすかった」という質問に対し、”そう思う”と”ややそう思う”で構成されることが多かった意見や質問に来る学生もいる一方、「難しい」との意見もあった。

5．今後の目標

昨今、新型コロナ禍の影響やICTの発展により、オンライン対面での講義なども行われるようになってきた。ZoomやGoogle drive、Foom等を使って、できるだけ双方向性を意識した授業を行ってきているが、今後、短期的にはさらにICTを活用し、今以上に双方向性のやり取り（質疑応答や学修状況の確認等）の充実を発展させていきたい。また、長期的には学生の学修状況の向上だけでなく、よりゴールが明確な国家試験合格率の高水準の維持を目標とする。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

・学内FD/SD活動
・2020年度日本理学療法士教員協議会参加
・人体機能学Ⅱの授業アンケート（集計表）



ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学科	氏名	藤田　信子

1．教育の責任

私は本学において、理学療法に関連する教育を担当している。その中でも特に、理学療法学的見地から行う検査・測定、プログラム作成に至る過程と方法の概論を学習する「理学療法評価学」、ヒトの関節の構造や筋肉の生理的機能に基づいて患者の姿勢や動作の観察し・分析方法を学習する「臨床運動学」、脳血管障害に対してICFに基づいた適切な評価の選択と実施方法を学習する「神経障害評価学」、脳血管障害の病態と医学的治療、標準的理学療法を学習する「中枢神経障害理学療法（総論・各論）」や理学療法における問題を科学的根拠に基づき解決する姿勢と能力を学習する「卒業研究」、知識と技術の向上および患者とのコミュニケーション、知識の具現化を学習する「客観的臨床能力演習」、その他、臨床実習に関わる教育を行っている。学生が実習施設で最もよく出会うのが脳血管障害の患者であり、患者を診るための観察力や対応力を身に着けるとともに、急性期から維持期までの継続的でステージに応じた理学療法の基礎知識を教育している。学生支援では、これまで1,2年生、13名のチューターを担当し、対面もしくはメールを用いて学生の学習支援や相談を行い、円滑で充実した学生生活の後方支援を行っている。

2．教育の理念・目的

私は、本学の教育活動において、以下の3点を重視している。

１）医療の専門家としてヒトの心身機能と社会生活に対する基本的知識、技術の伝達

２）多角的視点を持ち常に自分で考える力、理学療法の理論やモデルを説明できる力の育成

３）患者と信頼関係を構築し、患者の立場に立った理学療法を提供できる知識と技術を兼ね備えた理学療法士の育成

3．教育の方法

上述の教育理念を達成するために、例えば2年次前期の必修科目「神経障害評価学」では、次のような授業を行っている。　この科目では、脳や神経のどこに病状があればどのような症状がでるかをこれまでに学修した「解剖学」「生理学」「運動学」などと常に関連づけて説明している。検査測定が単なる技術の修得に終わることがないように、神経学的検査の意義目的を的確に把握し、得られた検査結果を客観的に解釈することで理学療法の質が向上することを解説している。成績評価では授業内容の理解を確認する小テストを毎回課しており、最終回の授業では実技テストを、最終的には国家試験過去問などと統合した終講テストを実施している。　通常の授業に加え工夫をしている点は、視覚教材を用いて疾患のイメージを視覚的に捉えることで病態の理解を深めたり、最近の脳に関連する基礎研究や治療に関する話題を説明することで、神経系理学療法への興味をもつ機会を設けている。また、実技指導では学生が主体的に経験できるよう二人、もしくは少人数でのグループ実技練習を行っている。検査技術だけではなく、患者の年齢や体調の変化、障害レベルに応じたインフォームドコンセントやコミュニケーションが適切適宜に実施できるよう指導を心掛けている。

4．教育の成果

「神経障害評価学」は授業終了後に学生の授業の感想や希望などが収集できる時間をとっている。2020年度はリモート授業ということもあり、学生の授業態度が可視化できなかったこともあるのだが、一部には神経系の授業は難解であるといった固定概念があり積極性に欠ける学生もいたが、脳卒中の病態や症状に関して自分で文献を調査してまとめたり、仲間とのグループワークを通じて苦手な意識を解消するといった機会を設けている。

5．今後の目標

短期目標①現状より魅力ある授業、および学生全員が積極的に参加できる授業を実施すること

②国家試験に必要な知識を定着させること

③既存の知識から疑問を持ち、学生が自発的に学習するような課題や目標を設定すること

中長期的な目標①学生が自ら検証し、測定、結果、考察した内容を学会発表、論文化すること　②他大学の教員と交流して、授業の改善を行うこと

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

webシラバス参照

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学科	氏名	城野　靖朋

1．教育の責任

授業科目	共通教育科目	基礎ゼミⅡ	1年次配当科目
授業科目	専門基礎科目	人体構造学Ⅲ（神経・運動器）	1年次配当科目
授業科目	専門基礎科目	人体機能学Ⅱ（動物性機能）	1年次配当科目
授業科目	専門基礎科目	運動学Ⅰ（総論）	1年次配当科目
授業科目	専門基礎科目	運動学演習	1年次配当科目
授業科目	専門基礎科目	人体構造実習	2年次配当科目
授業科目	専門基礎科目	人体生理機能実習	2年次配当科目
授業科目	臨床実習	早期体験実習(理学療法)	1年次配当科目
授業科目	臨床実習	地域理学療法実習	2年次配当科目

各種学生支援：3年次学年主統括（主担任）・各学年のチューター（アドバイアー）・オープンキャンパス・蹴球サークル顧問

2．教育の理念・目的

リハビリテーション学は日進月歩であり、大学を卒業してからも継続した生涯学習が必要になる。そのため、大学生の段階から能動的な学習姿勢を育むことが重要だと考えている。その能動的な学習姿勢の獲得には自己内省が必要なため、教育の場では自己内省を行う機会を与え、自己内省を習慣化させる必要があると考えている。このような教育により、大学卒業後もリハビリテーション学を学び続けることのできる人材を育成することが、教育の目的だと考えている。

3．教育の方法

各授業で小テストを実施するようにし、小テストのそれぞれの問題について回答の自信度も回答させている。また、回答の自信度と、問題の正解、不正解をもとに、学習者の知識の定着度が確認できるように指導し、自己内省の機会を設けている。また、自己内省の機会を設けるだけでなく、オンラインクラス（GoogleClassroom）でいつでも授業の復習が行えるよう確認テストを何度でも実施できるようにし、自己学習の機会を提供している。

暗記する項目の多い人体構造学Ⅲでは教員の作成した暗記カードを全受講生に配布して学習の支援を行っている。また、人体構造実習では教員が解説しながらスケッチしている動画と、Visible bodyでヴァーチャルに解剖している様子の動画*をオンラインクラスで視聴できるようにし、学習の支援を行っている（＊Wolters Kluwer社に確認のうえ実施しております）。

学部、学科のFDSD研修会に参加し、教育能力の研鑽に努めている（「遠隔講義・演習の課題と改善策」「大学中期計画と学科の方向性」「大学の仕事、教員の役割と責任」「シラバスと授業計画」「教育評価・ルーブリック」「FDのための情報技術研究講習会」「魅力的なオンライン授業の創り方」など）

オープンキャンパスにおいて、オンラインでの大学生とのフリートークコーナーに協力してくれた学生の指導（練習）や、学生によるキャンパス紹介のプレゼン準備の指導、実習室紹介のための大学生の自己学習を促すオンラインクラスの作成など、学生の能動的な取り組みを支援するよう教育している。

4．教育の成果

<u>自己学習機会の提供の成果について</u>

オンラインクラスの確認テストの実施回数に関してみてみると、人体構造学Ⅲの最初の授業の最初の確認テストは188回実施されている（2021年2月19日時点）。この科目の受講生は81人なので、全員が復習しているわけではないが、平均すれば一人1回以上授業時間外に確認テストを実施していることになるので、この方法による能動的学習の支援効果はあったと考える。

<u>授業アンケートについて</u>

人体構造学Ⅲに関して最終授業日にアンケートを実施した。その結果授業の内容の大半が「難しい・やや難しい」にもかかわらず、「自己学習はどの程度行いましたか」への回答で「他の科目よりも多い・やや多い」が「他の科目よりも少ない・やや少ない」よりも多かった。このことから、項目3の教育の方法で掲げているような内容には、学生が難しいと感じる科目であっても、自己学習を促す効果、すなわち能動的な学習姿勢を育むことに一定の効果があったと考える（資料1）。

また、本学全体で実施した2021年度前期科目の授業評価アンケート（5段階評価で「5」が最も良い）では、複数の教員で担当する科目の授業評価の「この授業は，総合的にみて満足できるものでしたか。」の項目の得点が人体構造実習で4.45、人体生理機能実習で4.39、運動学演習で4.29と、すべての科目で全体平均の4.27よりも高い得点であった（資料2）。

５．今後の目標

1年次、2年次の教育に引き続き、3年次、4年次ではさらに能動的に学習する姿勢を育んでいきたい。3年次、4年次では演習科目や臨床実習、国家試験対策といった能動的な学習が必要な学びの場が増えてくる。学習ツールがなくても自己学習できるようになるのが長期的な目標ではあるが、学習ツールの提供や、自己内省の機会を設けるといった取り組みは3年次4年次でも続けていきたい。また、ゼミ活動や授業以外の活動（例，学術大会への参加）などでは、学生が能動的に学習する意欲が湧くように情報や環境の提供を行っていきたい。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

資料1：人体構造学Ⅲ（神経・運動器）授業アンケート概要
資料2a：2021人体構造実習授業アンケート
資料2b：2021人体生理機能実習授業アンケート
資料2c：2021運動学演習授業アンケート

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学科	氏名	滝本　幸治

1．教育の責任

理学療法士として、臨床にて学生の臨床実習指導を行った後、2005年度より理学療法士・作業療法士養成校の専任講師として後進の育成に携わる。その傍ら、高知大学大学院教育学研究科（修士課程）にて修士課程修了（修士（教育学））、専門領域を追求するため高知大学大学院総合人間自然科学研究科にて博士課程修了（博士（医学））した。令和元年度より現職。これまで通算21年間にわたって臨床および教育機関にて学生教育に従事している。

主たる専門分野は高齢者の健康増進・介護予防に関するものであり、学生が志す専門職種（理学療法士・作業療法士）の職域が拡大しつつある領域を担当している。従来、フィールドワークに力を入れており、地域でどのような方々がどのような課題を抱えているか直接足を踏み入れることでしか得られない感性や気づきが得られるよう学生指導に当たっている。このような活動を通し、日本における少子高齢多死社会の現状の一端を学生自らが見聞きし考える機会をもつことで、自ら課題を発見し解決する力を身につけられるよう指導している（卒業研究など）。

現在の担当科目は、1年次（運動学入門、基礎ゼミⅡ、早期体験実習）、2年次（理学療法評価学、地域理学療法学、地域理学療法学演習、知己理学療法実習）、3年次（物理療法学、理学療法研究法）を担当。非常勤講師として土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科にて3年次（地域リハビリテーション学、地域リハビリテーション演習）を担当。

2．教育の理念・目的

本学のスローガンである「人を支える人になる」を基に、主体性の獲得と、多様な人々や文化に触れることで新たな価値観や生き方を構築できるよう思考力・発言力・行動力のある学生の育成を心がけている。また、高齢化先進国である日本が抱える種々の課題のうち、医療専門職として職能を課題解決のためにどのように活かすことができるかを考えることは、大きな目的の一つと考えている。

学生の教育場面においては、学生の興味の対象や活動の目的を共有し、あるときは先人として、あるときは同志として個々の学生と向き合うための時間や機会を心がけている。

3．教育の方法

学生の主体的な学習を促せるよう工夫してきたが、2020年度以降はコロナ禍の影響もあり教育（講義）体制が一変した。それらの影響を踏まえたうえで、以下に教育の方法について示す。

【授業の工夫】対面講義が叶わないときはオンライン講義（Zoom）を活用し、一部実技を伴う講義に限り、徹底した感染対策のもとで行った（教室の広さ・換気、学生のペア・座席指定、マスク・フェイスシールドの使用、手指消毒、使用物品の消毒など）。

オンライン講義は一方向的になりがちなため、オンラインコンテンツ（Google Educationツール等）を活用した。Google Classeroomでは、出欠確認とともに課題提供・提出、講義資料・動画の掲載に活用した。また、課題提出にはGoogle FormやGoogle Documentを利用した。Zoomにおいては、チャット機能を利用してリアルタイムに質問や解答を受け付けたり、ブレイクアウトルーム機能でグループワークを実施したりした。また、公開されている動画コンテンツやシステムなどを活用し、学生の職業・学習に対する意識向上や、医療・保健・福祉領域のトレンドや課題を汲み取れるよう配慮した。

【研修会等への参加】多くの研修会がオンラインで開催されたため、日程的に参加困難な学会や研修もネット環境さえあれば参加できたので好都合であった。類似の方法で、Zoomで臨床と大学を中継して学内の学生が実際の現場の様子を見学したりスタッフ・対象者と意見交換できる機会を設けることができた。

4．教育の成果

受講した講義動画をGoogle Classroomに掲載し後日視聴できる環境を整えたことにより、学生の復習ツールとして好評であった。また、オンラインツールを駆使した課題の提供・提出は、オンライン講義内容を復習・整理するよい機会となった。加えて、毎回、課題提出の際には質問を受け付け、学生のフィードバックを心掛けた。

一方、臨床での実習を学内実習で代替した点においては、臨床の様子を十分学生に伝えることが叶わなかったことに課題と限界を感じる。しかしながら、学内実習前後にオンライン学習ツールで実習目標に即した予習・復習教材を提供したこと、学外講師の協力による高齢者施設とのライブ中継などを取り入れた丁寧な事前計画のもと学内実習に取り組めたことは、事後アンケート結果より学生の充実感に反映されている。

5．今後の目標

短期的には、オンラインで実施してきた学習内容が定着しているか確認作業が必要である。学生が専門的な学習を進める過程において、共通する課題と個々の学生における課題を的確にとらえ、チューター・ゼミ担当あるいは学年担当教員による学生対応が求められる点である。

長期的には、充実した臨床総合実習となるよう必要とされる基本的知識・技術の修得を支援すること（履修科目にとらわれない対応も模索）、そして国家試験合格（受験者全員合格）のための学習支援が重要と考える。学生が長期的な目標を見据えて、卒業年次に国家試験に合格できるよう入学当初から意識を高める必要がある。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）
・シラバス・授業評価：2021年度 運動学入門（添付資料①②） ・学内実習：2020年度地域理学療法実習（添付資料③） ・研修会、学会参加：第57回日本リハビリテーション医学会学術集会（2020年8月），第7回日本予防理学療法学会（2020年9月），アジアフレイル・サルコペニア学会（ACFS2020，2020年10月），第7回日本地域理学療法学会（2020年11月），フレイル予防人材育成研修プログラム修了（2020年11月），第7回サルコペニア・フレイル学会（2020年12月），第55回日本理学療法学術研修大会（2021年2月），第60回近畿理学療法学術大会（2021年2月），第1回物理療法部門研究会（2021年2月），全国リハビリテーション学校協会オンライン研修会（2021年3月），2020年度日本理学療法士教員協議会（2021年3月）、World Physiotherapy Congress 2021（2021年4月）、第55回日本理学療法学術研修大会（2021年5月）、第58回日本リハビリテーション医学会学術集会（2021年6月）、第63回日本老年医学会学術集会（2021年6月）、第6回日本予防理学療法学会サテライト集会（2021年7月）

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学科	氏名	野中　紘士

1．教育の責任

私は本学において、「人体機能学II（動物性機能）」「人体構造学III（運動器・神経）」「人体生理機能実習」「人体構造実習」「理学療法早期体験実習」「地域理学療法実習」「基礎ゼミII」を担当している。特に主に1,2年生で担当している基礎医学分野は理学療法士・作業療法士の国家試験に出題されるだけでなく、2～4年生の専門基礎・専門科目の理解に必要な科目であるため、学生へ修得させる必要のある科目である。

2．教育の理念・目的

理学療法士・作業療法士として、患者・利用者を支える人材を育成するために以下の点を重視している。
1)理学療法士・作業療法士に必要な基礎医学知識の修得する。
2)理学療法士・作業療法士ととして適切な態度を修得する。
3)自分自身で調べ、考える力を修得する。

3．教育の方法

授業の方法
教育理念・目的を達成するため以下の方法で教育している。
1)理学療法士・作業療法士に必要な基礎医学知識の修得する。
理学療法士・作業療法士を目指す学生がまず修得すべき科目として、解剖学と生理学がある。解剖学とにかく暗記する必要がある科目であるので、暗記するよう学生に指導している。また、教科書の中から、学生が暗記すべきことが明確になるように、また暗記しやすいように資料を作成している。生理学も暗記する必要がある事項が多い科目であり、できるだけ理学療法士・作業療法士に必要な部分を重点的に解説するようにしている。また、両科目とも、理学療法士・作業療法士が知っておくべき疾患との関連についても説明をし、学生が興味関心を持ちやすくなるように工夫している。

2)理学療法士・作業療法士ととして適切な態度・身だしなみを修得する。
理学療法士・作業療法士は、臨床現場で働くにあたり患者との信頼関係構築が重要である。そのためには、理学療法士・作業療法士として適切な態度・身だしなみが必要になってくる。理学療法士・作業療法士は、カリキュラムに臨床実習が組み込まれており、臨床実習前に理学療法士・作業療法士として適切な態度・身だしなみを指導し、臨床実習で実践できるようにしている。

3)自分自身で調べ、考える力を修得する。
学生自身の興味がある内容に対して、文献を調べ、まとめさせる。その過程で、随時途中経過を報告させ、ファシリテートしている。また、基礎医学の知識と各種疾患などとの関係性についてレポート改題を課し、調べ、考える力を育成している。

FD/SD活動などに関わる内外の研修会への参加
学内で実施されるFD/SD活動については、やむを得ない事情がない場合は、原則参加することとしている。FD/SD研修会への参加により、より良い学生教育ができるように研鑽している。

自らの専門分野の成長
自らの専門分野の成長のため、研究発表や学会参加により自身の成長を試みている。

4．教育の成果

主として担当している人体構造学III（神経・運動器）、人体機能学II（動物性機能）、人体構造実習、人体生理機能実習の授業評価アンケート（5点満点）では、どちらの科目もすべてのアンケート項目について4以上であった。どちらの科目も、3教員によるオムニバス科目であり、3教員の総合評価ではあるが、おおむね高い評価を得ている。一方で、基礎医学を初めて学ぶ学生には、今まで聞いたことのない医学用語が多く出てくることもあり、覚えるのに苦労している様子である。したがって、もっと効率的かつ効果的に学習できるよう講義方法および配布資料を工夫する必要がある。

５．今後の目標

短期目標

理学療法士・作業療法士に必要な基礎医学の知識は非常に多く、学生はその暗記に膨大な時間を費やす必要がある。一方で、学生は基礎医学以外の教科についても勉強する必要があり、勉強時間の確保が課題となる。そのため、いかに効率的に暗記できるようにするかが重要となり、そのために学生の暗記用資料の修正や小テストなどにより知識定着をはかることにより、効率的に暗記できるよう工夫していく。

長期目標

理学療法士・作業療法士に求められる役割は、医療技術の進歩や社会のニーズにより変化していく。それら変化に対応していくには、知識の習得にとどまらず、自ら調べ、そして習得した知識をもとに考える能力が求められる。グループワークなどにより、単に知識の習得だけでなく、自ら調べ、そして習得した知識をもとに考える能力を育成するよう工夫していきたいと考えている。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

シラバス　［人体構造学III（神経・運動器）、人体機能学II（動物性機能）、人体構造実習、人体生理機能実習］

授業評価アンケート　［人体構造学III（神経・運動器）、人体機能学II（動物性機能）、人体構造実習、人体生理機能実習］

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学科	氏名	福原　啓太

1．教育の責任

・作業療法評価学Ⅱ(精神)
・作業療法評価学演習Ⅱ(精神)
・精神障害作業療法学Ⅰ(総論)［オムニバス］
・精神障害作業療法学Ⅱ(各論)
・客観的臨床能力演習（作業療法）［オムニバス］
・作業療法特論Ⅱ(精神)
・チーム医療論演習［オムニバス］
・作業療法卒業研究
・基礎ゼミⅡ

・3年生副担任
・検査・測定実習のコーディネーター
・評価実習・総合実習のコーディネーター
・卒業研究教務部会
・国家試験対策委員として国家試験対策を学生に実施
・ハラスメント相談員の実施
・各種実習関連の業務
・図書委員として学生選書とりまとめ

2．教育の理念・目的

私は、精神医学分野で実務、研究に従事して参りましたので、教育の理念・目的に関して、多元主義に関心を持っております。多元主義の姿勢として「完成した体系などは存在しない」「しがみつくほどのイデオロギーも存在しない」「何かを確実に知っているという主張はできない」「自らの試みについては明晰であることを求める」「決定のために十分な根拠が無くても選択をしなければならない」などで説明され、その対応において、「結果的にはその問題をよりよく扱える方法を個別の問題に対して適用せよ」とナシアガミーは提唱しています。その中核にはカールヤスパースの方法論的自覚があります。
私の教育理念は「理論や方法において明晰であること」「何かの方法論に依存しないこと」「問題に応じて柔軟に対応すること」「自らの考えにとらわれないこと」「他者の意見を信頼し拒絶しないこと」「盲目的に複数の方法や意見を取り入れないこと」といえます。
あえて言うならば、「価値観や信念」にとらわれないように柔軟な思考プロセスをもてるようにすることが重要である、が価値観と信念になります。

3．教育の方法

・学生から意見がある場合は、一度受容し、肯定的な側面と否定的な側面を分けてフィードバックします。また、一方で、別の条件である場合はその学生の意見は肯定的側面が否定的側面に、否定的側面が肯定的側面に転換されることがあるということも加えてフィードバックします。
・その中で、学生が自由な発想をし、他学生の意見を柔軟に取り入れ、適切な優先順位を図れるように促します。
・授業では、まず多元主義を学生に伝えます。このことは確かに哲学的で学生にとっては理解しにくいですが、学生にはディスカッションを通して学んでもらっています。具体的には、事例検討で方法論Ａを中心的に進める一派と方法論Ｂを中心的に進める一派に分かれてもらい、それ以外の方法論を拒絶した状態で事例検討を行わせます。そうすることで、他の方法論を拒絶したり、自分自身のもつ信念やイデオロギーにしがみつくことが如何に対象者のためにならないか、対象者にとって不利益か、ということを学ぶ機会を提供しています。
・複数の視点を許容できる、あるいは扱えるようになるため、この度公認心理師の国家資格を取得いたしました。（研修会の参加、専門分野の成長として）
・自らの専門分野の成長のために週1回精神科訪問看護に従事しています。地域で生きる精神障害者に向けた精神科医療、作業療法について自己研鑽しております。
・自らの専門分野の成長のために2か月に1回、精神科OT研究会で研修会を主催し、精神科医療・福祉において学ぶ機会を設けています。

４．教育の成果

・学生からの多元主義についての感想文において「普段なら考えつかないような考えがたくさんできて面白かった」「異なる複数の視点は対立していても全て患者さんのことを思って考えている」「Aの観点から考えるのが一番正しいと思っていたので、Bの観点から考えるのが難しかった」「何かを確実に知っているという主張はできないので、相手の意見を取り入れなかったり、決めつけたり、勝手な判断はしてはいけない。事例検討において絶対という言葉はない」「自分の意見をはっきりあいてに伝え、相手の意見も聞き、お互いの考えを教習することが重要でと授業を終えて感じた」「方法が対になる場合、意見が衝突した」「一つの視点しか目を向けていなかったら対象者さんにふさわしい支援内容を決定できないと感じた」「何かを採用すれば何かを犠牲にするということがわかった」「他の観点のひとと共通点が一緒だった場面があった」など書かれていた。

５．今後の目標

・視点を教えるだけでなく、「視点の持ち方を教える」ことを重要視しています。そのため、メタ的な観点になる。この点を教えるにあたって、学生によっては理解できない場合がある。より平易に理解ができるように授業を工夫していきたい。
・自分自身も多くの視点を許容できるよう自己研鑽を続ける。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

・WEBシラバス参照

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学科	氏名	吉川　義之

1．教育の責任

私は病院、訪問リハビリテーション、通所リハビリテーション、通所介護の臨床現場で「地域理学療法」「物理療法」「褥瘡」を中心に経験を積んできている。また、研究分野においては神戸大学大学院保健学研究科、神戸学院大学大学院総合リハビリテーション学研究科において上記の内容について、臨床研究ならびに基礎研究を実践してきた。これらの経験を基に本学では、運動学Ⅰ総論、基礎ゼミⅡ、地域理学療法、日常生活活動演習、物理療法、運動器機能障害学、早期体験実習、地域理学療法実習の科目を担当している。

リハビリテーション学科の学生は卒業後、ほとんどの学生が国家試験を受験し理学料療法士・作業療法士として病院や介護保険施設に就職しリハビリテーション専門職として勤務することになる。そのため、まずは国家試験に合格できる基礎知識を身につける必要がある。しかし、国家試験に合格する知識だけを身につければよいという問題ではなく、医療人として対象者に説明するためのコミュニケーション能力や判断能力などを備える必要がある。従って、医療専門職を育成する教育者として、国家試験に合格する知識を習得することに加え、多くの方と関り接していくことで人間力を鍛えることが教育の責任であると考えている。

2．教育の理念・目的

奈良学園大学の教育理念は「現実に立脚した学術の研究と教育を通じて、明日の社会を開く学識と実務能力を兼ね揃えた指導的人材の育成を目指し、時代の進展に対応し得る広い視野と創造性をつちかい、誠実にして協調性のある心身ともに豊かでたくましい実践力を持った人材を養成する。」となっている。それゆえに、学内教育では教科書や国家試験の問題を暗記するだけではなく内容を理解しながら学び、臨床教育では現場を感じ取りながら学内教育とのつながりを学ぶ機会を提供する。また、最新の情報を共有し学生同士で学び合える環境を作ることで本学の教育理念に沿った人材を育成できる。そして、その教育の積み重ねが「人を支える人になる」社会人へとつながると考えている。

3．教育の方法

1年次の運動学Ⅰ総論、基礎ゼミⅡは定期的に小テストや提出課題を実施している。これは、1年次から学習習慣を身につけ、今後医療人として常に学ぶ姿勢を保ち続ける必要があるため、早期から実践している。2年次の地域理学療法学演習、日常生活活動演習、運動器機能障害学は、1年次の基礎的知識を理学療法に結びつけやすくするために講義後には学生同士で理解度をチェックすることやグループワークを通して自分の意見を発言する機会や人の意見を聞く機会を設けいている。2020年度はコロナ禍であったため、オンライン講義で一方向性にならないようにGoogle classroomを使用して、学生の理解度をチェックするように実施した。実習科目は臨地実習を通して、これから学生が目指す仕事を見学し、また学内教育で得た知識を実際の患者を通して感じることを目的としている。

また、教育者として自らの教育方法を振り替えるため、FD/SD活動には積極的に参加し、フィードバックすることを心がけている。さらに、自らの専門性を成長させるため、担当科目の専門的な学術大会へ参加し、教育講演や特別講演の聴講はもちろん、自らで研究成果発表なども積極的に実施している。

4．教育の成果

小テストや提出課題を実施していることで学習習慣が身についている学生が一定数いると考えられる。理由としては、定期試験において満点に近い点数を取れるほど知識が蓄積されている学生が数名みられる。一方、学修習慣が身についていない学生も散見されるため、対象学生に対する教育方法の検討も必要である。

授業評価については5段階評価で約4.5の評価があり、授業に対する学生からの評価は一定レベル担保できていると考えている。しかし、授業評価アンケートの回答率が約30%であるため、授業に対して高評価な学生のみが回答している可能性もあるため、今後は授業評価アンケートの回答率を向上させながら授業評価を維持していく必要があると考えている。

5．今後の目標

長期目標：国家試験に合格して理学療法士・作業療法士として勤務するだけではなく、より広い視野を持った医療人としてグローバルに活躍できる人材教育を構築していきたいと考えている。本邦は世界に類を見ない、超高齢社会であるため、本邦を追いかけて高齢社会になっていく東アジアの先頭に立てる人材を育てていきたいと考えている。

短期目標：国家試験合格という明確な目標があるが、国家試験に合格するだけではなく、医療人として社会人としても、「人を支える人」を育てることが必要であると考えている。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

・シラバス添付（運動学Ⅰ、日常生活活動演習）

・日本褥瘡学会参加（シンポジウム2演題）、第1回物理療法研究会参加（教育講演座長、研究発表演題）

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学科	氏名	笹野　弘美

1．教育の責任

〇リハビリテーション学科

・日常生活動作学・日常生活動作学演習・地域理学療法学・地域理学療法学演習・老年期障害理学療法学・福祉用具生活環境論Ⅱ

・客観的臨床能力演習・基礎ゼミⅡ・早期体験実習・地域実習・卒業研究

〇看護学科

・保健医療学概論

〇学生支援

・2年生学年担当・臨床実習ＷＧ・地域実習担当・実習管理センター担当

2．教育の理念・目的

本学の建学の精神である「高度な専門学術知識に裏付けられた実践力を有する有能な人材を教育・養成し、地域社会及び社会全体の発達・発展に貢献する」という考えのもと、社会から求められる理学療法士を育成することを目的として行っている。また、高校までの与えられる教育ではなく、未来の自分を見据え学生自らが考えて学べるよう、学生の意思を尊重しながら寄り添っていくことを目標として教育している。

3．教育の方法

〇学生との接し方

・面談時、必要に応じて学生との位置を変える（例：個別面談は正面（180度の位置）に座るが、悩みの相談の場合は90度の位置に座る）。

・わからない事や困った事がある場合は曜日・時間を問わずメール等で対応し、実習時など緊急の場合は直接の電話も可とすることで学生の不安を取り除く。

〇授業の工夫

・地域理学療法学演習では理学療法場面のみではなく社会の中での障害者の活動等の動画を見せ、自分が理学療法士としてどのように関わっていけるかなど、学生自身で考える機会を多く作った。

〇FD/SD活動等

・FDSD WGとして研修会の企画運営および授業評価アンケート項目の検討を行った。

・学外のFDSD研修として第７回 大学・専門学校　教職員対象オンライン配信セミナー「医療・栄養系学生への充実した学習指導のあり方とは」に参加し、会議等で報告することにより教員間での情報共有を図った。

〇専門分野の成長

・コロナ禍ではあるが、仮説を検証するために予定していた研究データは収集できた。また過去に収集したデータを客観的に示す方法を検討しておりある程度めどが立ってきたため、学生の卒業研究に活かすことができる。

・過疎地域で地域特性を生かした高齢者の健康増進を図るための調査を開始、結果をもとに介入方法を検討予定。

・予防理学療法学会の役員として研修会を企画運営及び参加し、また関連学会へ参加することにより得た知識を学生に還元できた。

・理学療法ガイドラインの作成に携わり、特に若手理学療法士や学生の予防分野での対象者との関わり方について学ぶ機会を作っている。

4．教育の成果

学生に理学療法士として必要な知識と考える機会を与えることができた。しかし、コロナ禍でオンライン授業と対面授業が混在していたことにより、機器に触ったり体験をする機会が減り、それにより知識と技術の定着が困難であった。そのため、必要に応じて時間外での機器の使用を許可した自習時間を設ける予定。担当科目はすべてオムニバス授業であり、昨年度まではオムニバス授業のアンケートは非実施。今年度前期の授業アンケートは実施済であるが、まだ公表されていない。

５．今後の目標

授業では、対面を前提として計画を立てるが、急遽オンラインに変更になった場合でも学生の理解度が深まるような資料作りと理解度の確認方法を再度検討する。学生とのかかわりについては、学生が自ら考え行動できるよう、より個々に合った指導方法を見つけるためにコミュニケーションをできるだけ多く取る。また、臨床実習中は定期的に連絡を取ることで、実習途中でのリタイアやストレスの軽減を図る。さらに、理学療法の提供場面は多岐にわたることを伝える機会を多く持ち、学生が将来を決める選択肢を多く提供する。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

〇シラバス

・webシラバス参照

〇学生支援

・2年生担当として、学年全体に目を配り、学年が滞りなく進行するように務める。

・臨床実習WG及び実習管理センター担当として学生の臨床実習が円滑に進むよう実習地の確保・指導者への対応等、各種対応する。

・FD/SD WGとして、教職員が必要な知識・技能を身に付け、能力・資質が向上するための企画運営を行う。

〇研修会等の参加

・第7回日本予防理学療法学術大会・第7回日本サルコペニア-フレイル学会・予防理学療法研修会①②

・第７回 大学・専門学校　教職員対象オンライン配信セミナー「医療・栄養系学生への充実した学習指導のあり方とは」

・第6回日本予防理学療法学会サテライト集会（講師）

〇授業アンケート

・担当科目はすべてオムニバス授業であり、昨年度まではオムニバス授業のアンケートは非実施。

・今年度前期の授業アンケートは実施済であるが、まだ公表されていない。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学科	氏名	坪内　善仁

1．教育の責任

私は、老年期・地域の作業療法を中心に、基礎ゼミⅡ、地域作業療法学Ⅰ・Ⅱ、作業技術学Ⅱ、老年期作業療法学Ⅰ・Ⅱ、身体作業療法学Ⅲ、作業療法学演習、早期体験実習、地域実習、作業療法評価実習、臨床作業療法実習を担当している。また、チューター指導として、作業療法士・理学療法士の資格取得を目指す学生の教育・相談・支援を行うことが役割である。また、学生生活を充実するように、作業療法学専攻学生を中心に、サークル活動や地域のボランティア活動参加の支援を行っている。

大学での教育に加えて、私は大学近隣地域および奈良県内の他地域の高齢者支援・教育活動を行っている。こうした高齢者に優しい街づくりには、多世代交流が重要であり、学生の積極的参加を促し、高齢者との相互作用を目指した取り組みを開始している。

2．教育の理念・目的

1）医療・地域の現場で活かせる知識習得

医療・地域の現場では、机上で学ぶ知識を対象者支援の現場で発揮する必要がある。そのため、現場で活かせる知識習得を目指した教育を行う。

2）主体性・学習動機の確立

作業療法士は、進化する医療を常に学び続ける必要があり、卒前・卒後教育を一貫して行うように主体性・動機付けの確立を目指す。

3）広範な視野の獲得

作業療法士としての専門性と他職種理解に加えて、対象者の生活・人生を支えられるように人として視野の広がりを目指した教育を行う。

3．教育の方法

1）医療・地域の現場で活かせる知識習得

授業では、教科書の内容を分かりやすく示すとともに、自身の経験も踏まえて事例や実践例を多く取り入れ、学生のイメージを明確にする。また、現職者が学ぶ研修会等を学生に紹介し参加することで、現場の作業療法士の思考や知識を直接学ぶ機会を取り入れた教育を行う。

2）主体性・学習動機の確立

授業ではグループワークを多く取り入れ、積極的な語り・傾聴の機会とする。また、地域支援では企画から学生が参画することで、自ら考える機会とする。身体や脳機能の障害をもつ対象者の語りを直接聞く・学ぶ機会を通じて、学びの動機付けを図る。また、評価や支援では答えを探すのではなく、「なぜ」というリーズにングを明確にした主体的な学びを図る。その際、否定による失敗体験を避け、「説明・模倣・実践」の流れの中で学生にとって主体的な学習・意欲向上につなげる指導を行う。

3）広範な視野の獲得

作業療法士を目指す学生だけではなく、サークル活動やアルバイト、趣味活動への参加を積極的に支援する。より多くの人と語る・一緒に作業することで、多角的なものの見方を実体験として学ぶ。

4．教育の成果

今年度は、Covid-19の影響により、２）の対象者と直接話す・学ぶ機会や３）のアルバイト・サークル活動の機会は自粛が必要で、重要な効果は得られなかった。しかし、２）ではオンラインで実際に作業療法士・当事者の語る研修会に参加することができ、学生1名の感想では「対象者の困難やニードを捉える重要性を学び、学生の自分でも行える支援を考えて実践していきたい」と主体性・動機付けの確立につながったと考えられた。また、授業ではオンラインではあったが、グループワークを多く取り入れたことで1人1人が考えを述べ・他の学生の意見を聞くことができ、思考を深めることができた。

5．今後の目標

（短期目標）

①実習に向け実技指導の充実：知識の指導は継続しつつ、臨床実習で必要となる技術指導を行い習得を目指す。

②予習・復習の習慣化：これまでも授業では予習・復習を指導してきたが、未だに習慣化に至っていない。授業内容を見直し、テーマごとにつながりを強化することで、復習→予習の自然な流れで行えるように指導を行う。

（長期目標）

実習・臨床現場における継続教育の確立：卒前・卒後の現場教育に教員が積極的に参入し（学生を現場に引率し）、教員が現場で直接指導を行う機会・制度を確立する。様々な指導者の教え・考えを学ぶことも重要であるが、教員が同席し教育－臨床の協力体制を強化することで指導の一貫性を担保する。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

・授業シラバス：地域作業療法学Ⅱ（別紙１）、作業技術学Ⅱ（別紙２）

・学生と一緒に参加した研修会案内（別紙３）

・講師を務めた研修会依頼状（別紙４・５）

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学科	氏名	中島　大貴

1．教育の責任

講義・演習科目では，リハビリテーション学科作業療法学専攻の「基礎ゼミⅡ」，「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」，「作業技術学Ⅰ」，「作業技術学Ⅱ」，「地域作業療法学Ⅱ（各論）」，「日常生活支援学Ⅱ（各論）」，「作業療法総合演習」を担当している。また，実習科目では，「早期体験実習（作業療法）」，「地域作業療法実習」，「検査・測定実習」，「作業療法評価実習」，「総合臨床実習Ⅰ（作業療法）」，「総合臨床実習Ⅱ（作業療法）」を担当している。
講義や演習での教育に加えて，チューター学生に対しての面談等による学生生活の支援や指導を行っている。

2．教育の理念・目的

作業療法学専攻では，将来臨床に従事する学生の教育が必要であり，学生時代から臨床における倫理観および責任感や今後対象とするであろう症例の障害像を提示した上での臨床応用について伝えるよう心がけている．日々変化する医療現場においては常に自己研鑽が求められ，主体的に取り組むことが必要と考える。また，臨床において各患者に適応できる治療方法は異なることから，患者に応じたBest practiceを探索する思考過程が重要と考える．そのため，演習の基本は，学生自身での問題解決過程を支援したいと考えている。
講義内容によって，Subject-based Learning（SBL）となる場合もあるが，その際には事例の映像の提供や当事者をゲストスピーカーに迎えるなど実践的な学びとなるよう努めている．この中で，講義で学んだ知識の臨床緒要や作業療法士としての倫理観・適正等について考え，学修する機会を提供している．また，講義資料は教科書の内容に加えて，最新の知見や国家試験問題に関連する内容を入れ，講義終了時に講義に関連する国家試験問題を提示することで国家試験対策にも取り組んでいる．

3．教育の方法

令和2年度までに担当した科目は「基礎ゼミⅡ」，「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」，「作業技術学Ⅰ」，「作業技術学Ⅱ」，「地域作業療法学Ⅱ（各論）」である．「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」では，講義に加えて臨床場面を映した映像資料を提示し，障害像の理解に努めた．また，脊髄損傷の当事者やコミュニケーションツール「Orihime」を導入している企業の方をゲストスピーカーとして迎え，作業療法士としての責務について考える機会や臨床で有益な情報の提供に努めた．
「地域作業療法学Ⅱ（各論）」では，地域在住高齢者の健康増進の支援について，PBLに基づき講義を進めた．健康増進（認知症予防）に関する学生自身での情報収集より開始し，高齢者に適応する場合の注意点等についても意見交換を行った後，再度支援方法を検討した．最終的にはオンラインで地域在住高齢者とつなぎ，運動指導等を実践することで，高齢者の地域支援について体験的に学修する機会とした．
自らは，保健医療学部の教授が主催する講義方法の研修会への参加や領域長に教授を仰ぎ講義資料の作成を行っている．また，他大学教員との情報交換にも努め，オンライン講義に関する指導方法について検討している．作業療法や健康増進に関連する学会への参加も通し，最新の知見を得ることで学生への還元にも努めている．

4．教育の成果

「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」の講義後（当事者の講義後）に実施したアンケート・感想文では，「私の思う理想の社会はどんな疾患がある人でも不自由なく生活できる社会だと考えています．ですがこの理想の社会を実現することはとても困難です．だから
作業療法士がなるべく生きやすく生活に環境にしてあげることが作業療法士の役割の一つだと思っています」，「障害は個性であるという言葉を今まで耳にしたことがあった．理解はできないが，考え方の一つとして認識していた．しかし，講義を通して初めて障害は個性の一つであると認識できた気がする」といった意見があり，作業療法士としての責務や職業支援の重要性，病気だけでなく人を支えていくという視点が持てたのではないかと思う．一方で，主体的な時間外学習には結びついていないと考えられたため，この点は今後検討する必要がある．
「地域作業療法学Ⅱ（各論）」の講義後に実施したアンケート・感想文では，「健康指導を行う上で人に伝えることの難しさを学べた」，「対象者に応じた支援を考えるための方法を学べた」などの意見に加え，「この経験を活かし何事にも臨機応変に対応できる作業療法士になりたい」，「信頼される知識と技術を持った思いやりのある作業療法士になりたい」など学生にとって有意義に体験的学びになったと考える．高齢者の方も来年度以降の継続を希望されており，学生の成功体験にもなった．
一方で，講義後の確認テストや国家試験模試の結果から，知識の定着には結びついていない点もあり，今後の講義方式，講義進行には修正が必要であると考える．

5．今後の目標

今年度一定の成果が得られた実践的な学びを継続していくとともに，来年度以降も他教員の講義見学や講義資料に関する師事を仰ぎ，学生の理解度向上に向けた講義の進行方法に関して修正を行ったうえで，中長期的により主体的な学びを目指していく．また，今年度行っていなかった独自の講義アンケート等を実施し，学生の意見・理解度等を適宜確認しながら講義を進めたいと考えている．
作業療法に関連する学会・研修会や他職種に関連する学会・研修会に積極的に参加し，自己研鑽に努めるとともに，最新の知見を得ることで，最新の知識・技術について学生に還元していく予定としている．

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）
・添付資料：アンケート（感想文） ・Webシラバス参照

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学科	氏名	中田　修

1．教育の責任

私は本学において、作業療法学科を専門とする教員として以下の科目を担当している（未開講の科目を含む）。

単独：作業療法評価学Ⅰ（身体），高次脳機能障害作業療法学Ⅱ（各論）

共同：高次脳機能障害作業療法学（総論），作業療法特論Ⅴ（高次脳機能障害），作業療法評価学演習Ⅰ（身体），作業療法総合演習，日常生活支援学Ⅱ（各論），検査測定実習，作業法評価学実習

作業療法は、人々の健康と幸福を促進するために、医療、保健、福祉、教育、職業などの領域で行われる、作業に焦点を当てた治療、指導、援助である。私はこの作業療法の定義を基本として、未来の作業療法士である学生が対象者の心身機能の向上のみならず、生活の質の向上やその人の幸福の促進に資するように、一連の知識・技能を体系的に学ぶだけでなく、どのように学んだ知識・技能を対象者に介入していくのかに重点を置いて教育にあたっている。

2．教育の理念・目的

作業療法における作業とは、対象となる人々にとって目的や価値を持つ生活行為を指す。したがって私は作業療法士を目指す学生に対して、対象者一人一人の目的や価値観を的確に把握し、個々のニーズに合わせた個別性の高い介入ができる人材の育成を目指している。私は本学における教育活動において以下の点を重視している。

１）作業療法士に必要な基礎的な知識および技能の習得

２）対象者を主体的な生活者として理解し介入することができるようになる。

3．教育の方法

私は上記の教育目標を達成するために、学生との常日頃からのコミュニケーションを重視し、学生自身が何を考え何に困難さを感じているのかを把握することを心掛けている。授業においては、議論と実技（評価手技や介入手技）を多く取り入れている。具体的には問題を提示し、少人数によるグループディスカッションを実施し、各グループでの発表を経て討論するなかで理解を深めていく。評価学や高次脳機能障害学では、各評価手技ごとに責任グループを決めて、事前学習⇒実演⇒講師からのフィードバックと議論という流れで技能の理解と定着を図る。基礎知識の授業においては視覚教材を作成したり具体的な症例を通して行うことで、学生の理解を促している。また学内で実施されるFD研修には必ず参加するとともに、作業療法だけでなく、高次脳機能障害分野や看護分野の学会や研修に参加すことで自己研鑽に励み、得られた最新の知見をすぐに授業に導入することで、常にその内容を改善するよう心掛けている。

4．教育の成果

本年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため、オンラインでの講義が中心であった。そのため学生と講義以外でコミュニケーションをとることが困難な状況が続いた。ただし、気になる学生に関しては個別に面談を行い意見を聞いてアドバイスを行った。また講義においては双方向を常に意識し、必ず講義中に質問を受け付けたりチャット機能を利用した議論を試みていた。学会や研修会に関してはオンライン開催であり満足な成果が得られたとは言い難かった。ただし本年度は日本看護研究学会第34回近畿・北陸地方会学術集会に演題登録を行い、貴重なご意見をいただく機会を得た。

5．今後の目標

私の担当する授業に関しては、来年度は基本的に対面で行われる予定である。したがって本年度実施が困難だった上記３教育の方法を実践していくことを考えている。完成年限を迎えるまでには、授業の進め方において微修正が必要なこともあると考えられるが柔軟に対応することで、学生の理解の定着を心掛ける。また学会や研修会に関しては作業療法関連のみならずリハビリテーション医学や高次脳機能障害学など他の医療職が参加する学会や研修会にも積極的に参加し、自己研鑽を通して得られた最新の知識や技能を学生に還元していく予定である。また中長期的には学生の主体性を育むように心掛け、授業中の議論や実演では正のフィードバックを行うことで積極的な発言の機会を自ら得ようとするようにかかわっていく。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

・一般社団法人　日本作業療法士協会ホームページ，https://www.jaot.or.jp/

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学科	氏名	野田　優希

1．教育の責任

・基礎ゼミⅡ　・運動学演習　・スポーツ医学　・スポーツ障害理学療法学　・筋骨格障害理学療法学Ⅱ　・理学療法計画論　・早期体験実習　・評価実習　・総合臨床実習Ⅰ　・総合臨床実習Ⅱ

・学生サークル　責任者

2．教育の理念・目的

臨床で活躍できる思考力、対応力、コミュニケーション力を養う

3．教育の方法

講義では可能な限りイラストや実際の患者さんの写真またはビデオを多用し,分かりやすいように工夫している．また専門的な言葉や表現については分かりやすいよう説明を加え、学生の理解の向上に努めている．

教科書的な内容を実際の症例に重ね合わせ，机上での勉強と臨床でのギャップを極力少なくするように努めている．

臨床での経験談を交え、我々の役割の重要性や、やりがい、そして責任の重さを伝えるよう意識している。

授業の中で、学生が聞いてみたい事柄についてアンケートを実施し、講義の中で可能な範囲でその事柄に触れるようにした。

講義では質問しやすい雰囲気を作り、オンライン講義中ではチャット機能を用いて、随時質問を受け付け休憩時間中などに回答するようにした。

4．教育の成果

成果を確認することがまだできてないため今後の課題である

5．今後の目標

・短期的には、スポーツに興味を持っている学生に対し、スポーツ現場に赴き実際に選手に触れることで、スポーツ分野へのさらなる興味や知識の向上を図りたい。

・長期的には、奈良学園の各部活のサポートに学生が主体的に関わり、知識、技術の必要性を感じることで積極的に学ぶ体制を構築したい。

・　必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

シラバスは別途添付

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・リハビリテーション学科	氏名	前田　吉樹

1．教育の責任

・担当授業科目

痛み学概論、疼痛リハビリテーション学、運動学演習、基礎ゼミⅡ、客観的臨床能力演習、理学療法卒業研究

・各種学生支援

リハビリテーション学科 実習管理センター 代表

2．教育の理念・目的

教育理念

大学は研究の場であること

価値観

卒後からでも学べる医療職のスキルよりも、研究する上での視点や考え方の方が大学教育では重要であるし、卒後も役立つ。

3．教育の方法

・スマコク、イマキク、Google アプリ等、インターネット回線を利用したアプリを積極的に利用、学習意欲を高めている

・演習では画一的におこなう説明は動画等のオンデマンド教材で済ませるようにし、授業時間で直接やり取りできる時間を確保している

・授業の終わりに確認問題を実施したり、グループワークを入れたりして知識の浸透を図っている

・上記、様々なコンテンツやデバイスを用いて体験・参加型の授業となるよう心掛けている

4．教育の成果

・毎回の授業に対するコメントをとっているが、「わかりやすい」「興味をもって聞けた」とのコメントをよくもらえる

・テストが終わった後の理解度や、授業の内容が上位学年の授業や実習等で役立っているかどうかは確認できていない

5．今後の目標

・短期的：まだ完成年度を迎えていない学科なので、3年生、4年生の意見を聞きながら授業内容をbrush upしたい

・長期的：自身の授業が実習や卒後の臨床で役立っているかを検証したい

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

Googleフォーム度動画を用いた確認テストの例

・

12/17 痛み学概論14 課題

〆切: 12/18(金) 23:59

このフォームを送信すると、メールアドレスが記録されます。

maeday@nara-su.ac.jp ではないですか？ アカウントを切り替え

*必須

学籍番号 *

回答を入力

氏名 *

回答を入力

次の動画は、授業で見せた診療の3回目の様子です。あなたなら、この患者さんにどのような運動を指導しますか？その理由も併せて答えてください。

この患者さんに指導する運動 *

回答を入力